

キャッチコピーづくりの面白さを考える

5年生の市川学級で国語科のフォローアップ授業がありました。

単元は「先年の釘にいどむ」という、和釘職人の願いに迫る説明文教材です。

市川先生の本時の目標は、「伝えたいことをキャッチコピーで表して紹介し合うことで、自分の考えを深めることができる」というもので、本校の進める図書館教育の一環の授業でした。キャッチコピーの取組は、先週の藤原先生の全校授業でも提案があったもので、その時の研修を生かしたこちらも提案性のある授業でした。

キャッチコピー作成は、私自身は行ったことがありません。どうもこの手の活動はこれまであまり好きではありませんでした。しかし、今日改めて目前で見て、いろいろと考えを巡らせ、やり方によっては意外とよい活動なのかもしれないと思いました。

キャッチコピーはあくまでも学習手段の一つであり、この活動を通して、ものの見方・考え方など、国語の力を身に付けさせることが国語教育の目的です。

市川学級では、藤原授業同様にキャッチコピーそのものの理解から入りました。藤原授業と同じ「やめられないとまらない」というキャッチフレーズを出すなど挑戦的(^_^)な展開に笑ってしまいました。

授業を見せてもらって考えたことは次の点です。

①キャッチコピーの授業はおもしろいが、怖くもある。それまでの読み取りがよく分かる。本質に迫っていれば、キャッチコピー作成で、笑いをとるだけのふざけたコピーは出てこないだろう。今日の児童が作成したコピーは、職人の思いに沿った内容が多かった。

②国語科の授業で作成するキャッチコピーは、単に読者を引きつけるだけのものではない。教材の書き手の意図、登場人物の思いを受け止めた上で、コピーの言葉を選びたい。その点で、授業で例を示す際には、コマ-シャルなどの商業的なキャッチコ

ピーに偏らないように留意したい。

③キャッチコピーの取組は、研究授業だけで一回限りに取り組みさせるのではなく、年間を通して継続的に取り組みせると、さらに効果的である。物語分でも説明文でも、学習のまとめとして活用できるだろう。年間を通して、どんどんコピー表現が上達していくのではないだろうか。

④1単元の最初と最後にコピー作成をさせてもおもしろい。初発の感想の代わりに作り、学習の最後に作ったコピーと比べてみたら、読みの深まりが実感できるだろう。

その他の授業の感想として、

○市川先生は、児童の発言への反応の仕方、取り上げ方にセンスがある。児童の発言で授業を進める、深める姿に感心しました。

○学習内容がきちんと板書される。これは大変重要なことです。児童の発言の中から、このパターンのキャッチコピーのよさを黄色

チョークできちんと板書しています。これが指導案の「学習内容」です。指導案にも明記し、授業でも板書する。今日は、板書したからこそ、今倉君は自分の発表の際に、先生が書いたこの「学習内容」の言葉を用いていました。こうやって、児童の言語能力が上がっていくのだと思います。皆さんも、必ず学習内容を板書するように努めて下さい。

○ひとつだけアドバイスです。グループ協議をする意味はしっかりと考えておいてください。一人学びとの違いは、他人の考えを知ることと、もう一つ、みんなで考えることで自分の考えも深まることです。「班の中でどのコピーが一番いいと思うか」など、発問を工夫したらさらに話し合いが深まったと思います。

授業を見て、いろいろと勉強になりました。他人の授業を見ることはこの上ない研修になりますね。

